

私たちは、誰もが  
完璧にはなれない存在。

だからこそ、補い合い、  
学び合い、惹かれ合う。

互いに長所で好きになり、短所で愛する。

“自分にはないもの、”があるから、  
“自分にしかないもの、”があるから、  
たくさんの感情を  
経験できる。

その一部が、確かに  
私から誰かへの優しさに  
変換できているのだと

時間が一向に癒して  
くれないあのときの感情を、  
そんな後ろ向きな想いに永く捉われ  
続けている自分自身を、  
否定する必要はないのだと、  
それも紛れもない自分の一部なのだ、

言葉というものは、放ち手の純度のままには  
伝わらないし、常に受け手側の環境に依存し、  
変容する。

知性を武器にせよ。  
感性を研ぎ澄ませ。

姿勢良く、先端を、細部こそ美しく磨け。

自分の言葉を紡げ。

私はこれからも、たとえそれは無謀だと言われても、  
そこは無難に行けよと諭されても、

「それが私の大事な読者と  
著者のためになるか」

その判断基準を曲げるつもりはない。  
いつだって静かに、  
この熱を燃やしていく。

劇薬みたいな言葉の奔流。  
「このまま終わっていいのか」  
と心が叫びだしました。

小説家 カツセマサヒコ氏 推薦

だつて、そもそもフエアじゃない。  
誰かの素敵な“一瞬”と自分のリアルな“一生”を比べるなんて。  
この世界は、見えているものの方が少ないのに。  
人は、すべてを見せているようで、何も見せてはいないのに。

「ある編集者の主観」  
小寺智子著